

二〇一三年二月二三日

矢のごとく稚魚は春光まきちらし
蹲踞の柄杓が躍る春の水
たらちねの遺影に隣る古雛
ひもすがら降りみ降らずみ春の雪
参磴に枝さしかけて宮の梅
ドリーネの底まで走る野火のあり
冴え冴えとして中天の月円か
朝練のはじける声に春立ちぬ
扁額は光明無限梅真白
白鷺の微動だにせず春寒し
畑を焼く麓の煙のろしめく

二〇一三年二月二三日

古町の路地は迷路や梅寒し
柳の芽破線となりてなびきけり
笠連ねあぜ道をゆく春遍路
蒼天に鳶放ちたる雪野原
比良の嶺を盾に裾野の畦を焼く
梅寒しうどん茶店に長き列

二〇一三年二月二二日

古雛灰と肌色のこりけり
春雪の窓に轆轤を引くをみな
下萌の山頭火句碑存間す
啓蟄の畑に林立もぐら除け
一輪のほころびに足る梅見かな
春風や干魚吊す蟹の家
あるなしの風に芽柳揺れやまず

わかば
うつぎ
なつき
こすもす
さつき
三刀
せいじ
ぼんこ
菜々
満天
さつき
菜々
さつき
ともえ
有香
雅流
さつき
つくし
菜々
よし女
有香
なつき
ともえ
満天

二〇一三年二月二〇日

芽柳の風に色ありうすみどり
駈けてくるポニーテールや春の風
マリア像とり囲みたる芽吹きかな
土手の野火火攻めきながら池囲む
パドックの人氣の馬の息白し

二〇一三年二月一九日

轆轤ひくをみなのお指春灯下
梅宮に犇めきあへる受験絵馬
春光や堰あまた落つ芦屋川
春山を撫でゆく雲の影法師
相会釈してすれ違ふ春山路
胎動といふことばあり青き踏む
手びねりの絵付けに選ぶ春の色

二〇一三年二月一八日

道問へばコートの女土地訛り
輸送船進むともなく沖隴
共に老幼幼馴染や梅白し

二〇一三年二月一七日

鯉躍如尾鰭に濁る春の池
梅ふふむ枝に神籤のかた結び

はく子
さつき
菜々
さつき
よう子
菜々
なつき
せいじ
さつき
さつき
宏虎
菜々
あさこ
さつき
あさこ
三刀
ぼんこ

毎日句会みのる選・二〇一三年二月二五日